

社団法人 東洋音楽学会 会報 第60号

発行(社) 東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2 八光ハウス201号

TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/>

目次

大会レポート	1	図書・資料等の受贈	8
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	6	新刊書籍	9
会費納入についてのお願い	6	新発売視聴覚資料	10
第21回田邊尚雄賞アンケートのお願い	6	編集後記	10
「第5回中日音楽比較研究国際シンポジウム」報告	6	第34回通常総会議事録(抄)・添付書類	10
会員異動	7		

第54回大会レポート

(2003年10月25日-26日/広島エリザベト大学)

第1日(10月25日)

◇実演付公開講演会「中国地方の民俗芸能」

中国地方の各地には、珍しいそして古い民俗芸能が少なからず残っている。その中から今回は田植行事にまつわる芸能と神楽がとりあげられ、片桐功氏による「中国地方の田植行事と芸能——安芸系と備後系を中心に——」と三村泰臣氏の「中国地方の神楽——山陽側の神楽を中心に——」の二つの講演、引き続いて島根県石見町の鹿子原虫送り踊り保存会による「虫送り踊り」と広島県東城町比婆荒神神楽社による「八重垣」が上演された。二つの講演はどちらも音響や映像資料を駆使し当日の実演以外の例が示され、レジュメも準備されており分かりやすい講演だった。

片桐氏の講演では稲作を中心とした行事は1) 播種儀礼、2) 田植儀礼、3) 稲作の成長過程における儀礼の三つがあるという。しかし、時代の変化により1)に関連する行事は現在では行われていない。

2)の行事のなかでも大田植は現在も行われており、安芸系と備後系に分けられる。両系統の田植歌をそれぞれ歌詞、楽器、動作、衣装などを取り上げて比較検討した結果、安芸系は男性陣が華やか、太鼓の梓さばきがアクロバティック、そして歌はのびやかで明るい。それに対して、備後系は飾りが比較的地味、歌は軽快でテンポが速くリズムカルである。備後系には大山信仰に根ざした歌が多く、ナガレ構造といわれ叙事的な内容である。

3)は6月半ばから7月にかけての害虫の発生する時期の行事である。田の神はこの頃に害虫を連れて山へ帰るが、それをサノボリあるいはサナボリという。サノボリが「死後は害虫になり稲を食い荒らす」と言って源平合戦で死んだ実盛の伝説と結びつき、実盛人形を押し立てて踊りながら行列して歩き、人形を最後は川に流すか燃してしまう。虫送りの行事は鹿子原の方々による実演があった。

三村氏の講演は、神楽の豊富で盛んな中国地方、特に山陽系の神楽の紹介と特徴に関するものであった。山陽側に現在神楽は約七つ伝承されているが、山陽系の神楽の大きな特徴は神がかりすることである。それら七つ(將軍型:芸北・山代・安芸十二神祇、荒神型:芸予諸島・備後・備中・比婆)の概要がスライドやビデオを使用しながら紹介された。將軍型の特徴は例年開催、米袋の米をまき、神がかりし、矢を放つ。荒神型は式年開催、藁で作った蛇にとりつき神がかり。

一般には神がかりのあと託宣が行われることが多いが、広島神楽に託宣はみられない。何故神がかりかはわかっておらず、従来の研究者の間では、託宣の部分が失われたのではないかと考えられていた。しかし三村氏は江戸時代の文献資料:『將軍正行』(明治時代に書かれたが、内容は江戸中期)、『玖珂郡史』(享和2年)、『広兼文書』(天保9年)にみられる記述と現行の実践から、「神がかり」の主たる目的は悪霊の封殺あるいは鎮送と考えた。藁蛇は死霊とみなされていたことから、藁蛇の登場と神がかりの関係の説明ができる。神がかりすることにより超自然的な力を獲得し、悪霊あるいは死霊を退治する。さらに、舞いの激し動きや音楽のテンポの速さ、賑やかさなどが特徴とされ、悪霊退治の目的を補強する。

現在、広島ではショー的な要素の強い「スーパー神楽」に人気があるそうだが、それらにも伝統的な神楽の特徴が伝承

されている。

比婆荒神神楽の実演「八重垣」は四日四夜続く神楽の一部で、深夜から夜明け頃に行われる演目である。道化役と太鼓方との掛け合いや、興にのった道化役により演歌が何曲も歌われ、即興的な要素がみられた。また須佐之男命による八岐の大蛇退治は舞台一杯に繰り広げられ、迫力のあるフィナーレであった。(大谷紀美子)

◇ 第20回田邊尚雄賞授賞式、懇親会

第20回田邊尚雄賞は、根岸正海さん『宮古路節の研究』と福岡まどかさん『ジャワの仮面舞踊』の2名の受賞であった。ザビエル・ホールで行われた授賞式では、蒲生郷昭選考委員長から選考経過と選考結果の報告があったのち、谷本一之会長からご両人に賞状が授与された。

ここ数回の田邊尚雄賞は、比較的若い方々が受賞されている。中堅世代の会員が優れた研究成果を出版して活躍しておられることは、嬉しい限りである。東洋音楽学会は、ここ十年ほどの間に各種の制度改革などを行い、従来とは一回りも二回りも若い世代が例会活動の中心となっている。近年の受賞者若返りも、そうした学会活動の活性化と軌を一にした現象のように思う。

懇親会は会場を近隣のホテルに移して行われた。田邊賞受賞祝賀会としては、それぞれの受賞者の研究仲間を代表して、渡辺浩子さん、久万田晋さんが受賞者の人となりを紹介しながら祝意を述べられた。各受賞者が家族にも支えられて研究を築き上げられてきたことを披露されるなど、心温まるお祝いの言葉であった。

懇親会は、会場の広さに比べて大勢の会員が参加し(実行委員会の期待が控えめだったのかも)、料理の美味しさとも相まって、情報交換の会話も弾む賑やかな会になった。最後に実行委員長片桐功さんの挨拶があったが、公開講演の講師も兼ねておられた片桐さんの八面六臂の活躍が印象的であった(金城厚)

第2日(10月26日)

◇研究発表A1(会場505号教室。司会:増山賢治)

セッションA1は増山賢治氏の司会で、中国音楽に関する二件の発表が行われた。

『魏氏楽譜』の解読について

一明楽における中国の宮廷音楽と仏教音楽一(楊桂香)

楊桂香氏の発表は昨年の大会に引きつづく、日本に伝来した明楽の譜『魏氏楽譜』に対する詳細な資料研究の一端である。東京芸大本『魏氏楽譜』(発表者は『魏氏楽譜』Bと呼ぶ)所収240曲の曲名を『楽律全書』『儀礼経伝通解』と対照させた結果、181首以降の曲には太廟楽、太常雅楽など祭祀音楽を含む宮廷音楽、および「仏楽」と題された仏教音楽が含まれていることを明らかにした。今回の発表は解読それ自体を問題にするものではなかったが、従来、明代の民間音楽として漠然と了解されていた明楽のオリジンを解明する研究として意義のあるものであった。発表終了後、日本での明楽伝承における傾向の有無、『魏氏楽譜』Bの編纂者名、魏双侯がもたらした音楽文献、現存する中国仏教音楽との関連、に関す

る質疑応答があった。一聴衆として感想を述べるならば、楽曲名を通覧できるハンドアウトがあればよりわかりやすかったと思う。(植村幸生)

「鄭観文と「雅楽」復興:近代中国知識人の儒教観」

(尾高暁子)

この研究は、「大同楽会」を興した鄭観文という人物の思想と行動を通して、20世紀前半の中国音楽界における近代化の一端を明らかにするものである。本発表そのものは一つの問題意識の研究と位置づけられよう。鄭観文は大同楽会において中国音楽の伝統と西洋音楽をともに研究しながらも、康有為らの儒教擁護論に依拠しつつ理想の「国楽」を実現することに腐心し、清朝の宮廷音楽に由来する「国民大楽」を創始した。しかし彼の試みはほとんど定着せず、その後の評価も決して高くない。発表者はこうした鄭観文の試みを、儒教に対する批判と擁護がせめぎあう時代を生きた中国近代知識人の「自己保存型の変革」の一事例と結論づけた。質疑では、鄭観文が行った音楽の実態と思想との関係、儒教儀礼の復興との関係などが話題となった。今後「国民大楽」などの音楽の実態が解明されることで、鄭観文の音楽(思想)史的な位置づけがさらに明確なものになるだろうと期待される。

(植村幸生)

◇研究発表B1(会場506号教室。司会:蒲生美津子)

12件の研究発表のために、3つの分科会が設営された。定時の9時30分に始まったのが気持ちよかったが、A1もC1も同様であったろう。ふたつの発表の変わり目で聞く人の出入りがあったが、どちらも二十数人が、熱心に耳を傾けた。

「皇典講究所唱歌について」(ヘルマン・ゴチェフスキ)

最初の発表は、ヘルマン・ゴチェフスキ氏による「皇典講究所唱歌について」である。保育唱歌のあとをうける形で、皇典講究所(國學院大学の前身)が、新しい「雅楽唱歌」の教育を行っていた事実だけはすでに知られていたが、発表者は、24曲を収めるその楽譜をこのほど発見して、唱歌そのものの実態を明らかにした。新資料の発見を知るのは、いつもながら、楽しいことである。

発表では、詳細な配付資料によりつつ、24人の撰譜者と保育唱歌の撰譜者との異同につづいて、嬰商の使用が多いこと、変宮の使用例があること、伴奏の和琴が多く曲に共通していることなど、保育唱歌、とくに後期の保育唱歌との違いが指摘された。ただし、皇典講究所唱歌の話に入ったのは約10分経過してからであり、用意された内容の半分も述べられなかったという感じであった。最初の10分は、どうでもいい前置きではけっしてなく、発表テーマの背景であったから、20分で発表することの難しさを痛感した。発表後、24曲の使用目的や、なぜ一人一曲なのかなどという質問が出たが、それを明確に示す資料はない、とのことであった。今後の研究の進展が望まれる。なお、配布プリントには、その内容については発表者に著作権があり、無断の複写、引用を認めないむねの記載があった。当然のことなのだろうが、私などはふだんあまり考えたことがなかったので、ドキッとしました。

(蒲生郷昭)

「軀の浦安国寺蔵阿弥陀三尊像の胎内納入龍笛について
—鎌倉時代の龍笛一例— (高桑いづみ、野川美穂子)

両氏が勤務する東京文化財研究所芸能部が10年前から継続的に実施している楽器研究の対象は、昨年度から管楽器になった由で、発表はその成果の一部である。両氏とも登壇したが、口頭発表を高桑氏が、映写画像の部分指示を野川氏が担当した。

発表は、まず、伝世する管楽器の研究のむずかしさとして、製作年代がほとんど分からないこと、吹奏ができないこと、この2点を指摘する。しかし、このたび調査した一管は、鎌倉前期の作であることが確認できるうえに、試奏も許されたという、きわめてまれな例であるとのことだった。

調査結果の要点は、この龍笛は、指孔のところで竹皮をむいていないこと、平樺巻ではなく麻糸を巻いた上に漆を塗っていること、セミが別材で補ったものではなく竹の小枝を取り除いたものであること、管内に漆が塗られていないこと、そして、そのように作りが違うにもかかわらず音律は今日のものと同じであること、などであった。さらに、発表題目にもかかわらず、ほかのいくつかの事例にも言及し、管楽器研究を一步前進させた。

プリント配布にかえてパワーポイントによる画像を活用した発表は、きわめて分かりやすかったが、制限時間のかかりの超過に対しては、終了後、司会者からの注意があった。

(蒲生郷昭)

◇研究発表C1(会場507号教室。司会：藤田隆則)

このセッションは、主にポピュラー音楽の領域を研究されている方々の発表をとりあげるものであった。

「宇多田ヒカル《Automatic》に聴く「産み字」の歌唱と効果」
(村田公一)

本発表は、宇多田ヒカルのデビュー曲であり、700万枚のセールス記録を樹立したアルバム『First Love』の冒頭におさめられた《Automatic》をとりあげ、歌詞カードと歌詞の聞き取りを採譜したものを詳細に比較するという形で歌詞の音楽分析をおこなうことにより、歌詞の歌いこなしの特異な性格について検証しようとするものであった。ここで村田氏が特に注目するのは、音をのばすかわりに、もう一度母音を打ちなおしてうたうように聞こえる部分である。氏はこれを産み字とらえ、歌に更なるアクセントをくわえていると評価する。そして、そのようにとらえることによって、日本語の音韻システムとアフリカ黒人音楽のリズムが適切に接合されていることが明らかになると結論づけた。本発表に対しては、韻律論を元にしたものではない、歌詞の音楽分析の新たな方法として評価する意見や、氏が指摘する産み字や宇多田が熟年・中高年層にもうけいれられているという事実の背景として、日本の伝統的な音楽の要素との関わり(宇多田の祖母は浪曲に造詣が深く、母親は演歌歌手である)を示唆する意見などがだされた。

(田井竜一)

「採譜の理論的再検討—音楽体験の視覚化に向けて」

(谷口文和)

谷口氏の発表は、音の視覚化に関する方法論の問題点を整理し、それを乗り越えるための一つの方向性を提示するもの

であった。氏はまず、チャールズ・シーガーによる、有名な規範的/記述的楽譜という二分法をとりあげ、記述的楽譜に付与された「音楽の客観的な記述」という発想自体に疑問をなげかける。ここで氏が援用するのが、ジャン=ジャック・ナティエの記号学的三分法である。このモデルでは、音楽の「作り手/聴き手」に相当する「創出/感受レベル」と、両者にとっての痕跡としての「中立レベル」とがたてられているが、氏は採譜を、感受レベル(聴取)から創出レベル(演奏)を視野にいれつつ設定される中立レベルと位置づける。そして、採譜という行為は、「音楽構造」の分析のみならず、中立レベルを設定することで初めて可能となる、音楽的事実全体としての「音楽体験」を問題にすることを可能にすると指摘する。その上で、音楽体験の多様性への着目が必要とし、「音楽の内在的構造の発見」から「音楽体験の記述」、すなわち「音楽体験の視覚化」への転換を提唱するのである。本発表に対して会場からは、必ずしも「生の体験」が真正性を証明しないのではないかという指摘や、文化の担い手の「音楽体験」や「採譜」といった概念もくみこむべきではないかといった意見がだされた。

どちらの発表も、精密な形で論が展開され、様々な示唆にとんだものであり、当日の参加者だけが共有するのでは、あまりにももったいない内容であった。ぜひ機関誌等に投稿していただき、より広い場で議論が更に展開する事をのぞみたい。

(田井竜一)

◇研究発表A2(会場505号教室。司会：寺内直子)

「宮内庁楽部における雅楽曲の演奏レパートリー

—その演奏頻度と旋律的特徴の関わりを中心に—

(清水淑子)

清水淑子氏の発表は、昭和31年から現在までの宮内庁楽部の春秋の公開演奏会で演奏された楽曲を調査し、楽曲により演奏頻度が大きく異なることを示した上で、演奏時間や特定の儀式でしか演奏されない等の明白な理由以外の楽曲の演奏頻度の違いが、楽曲に含まれる異なるタイプの最小旋律型(頻出するもの、一曲にしか出現しないもの、その中間)によってもたらされるその「調子らしさ」の度合に関係していることを、現行の筆楽譜の統計的分析(今回は平調のみ)によって示そうとした研究である。前段で示された戦後の楽部での各楽曲の演奏頻度の問題と、後段の譜の統計的分析にもとづく調子らしさの析出の問題は、むしろ二つを切り離して別々に検討・考察されてよい研究課題のようにも思えた。

後段の最小旋律型の分析に関して、フロアから(1)各調子には元来原調の異なる曲が編入されており、調子らしさの分析でも原調の違いを考慮する必要があるのではないかと(鳥谷部輝彦)、(2)頻出する最小旋律型をその調子らしさと解してよいか、他の調子との間の共有関係も考えるべきではないかと(ヘルマン・ゴチェフスキ)、また司会から(3)分析対象を古譜、あるいは現行譜でも筆楽以外の譜にしたり、運指法を考慮する等によっても結果が変わる可能性があるのではないかと(寺内直子)、という発言があった。研究目的に即した分析対象・方法の再検討と複数の調子の分析から新たな展開が生まれることを期待する。

(塚原康子)

「活動写真興行の成立と西洋音楽」 (今田健太郎)

今田健太郎氏の発表は、当日の発表題目が「活動写真興行の成立と西洋音楽」と改められ、大会プログラム掲載の要旨からは少し逸れたが、活動写真における視覚メディアと音との関係が追究された。

明治末期に興行を成立させた活動写真の音の成立ちを考えるために検討されたのは、視覚メディアとして活動写真に先行した幻灯会と、常設の遊興空間であった歌舞伎の芝居小屋における音のありかたである。幻灯は、(1)科学・歴史・地理・衛生などの近代的関心を共有するもので、(2)説明者が存在し映像は脇役的、(3)会場は商業地・住宅地に隣接し、上映時には外界から遮断される環境にあった、など芝居とは異なる特色をもっていたが、音楽隊をもつ場合でも音を映像と重ねたのか別々に入れていたのかは不明であるという。活動写真の音は、上映時に会場の内外を遮断した点では基本的に幻灯のありかたを踏襲したが、興行前の会場外での楽隊による宣伝(開演後は客席後方で演奏)や駒田好洋の口上などの興行面では、劇場の外に内部の音を拡散させていた芝居小屋の手法を持ち込んだ、と結論づけた。

視覚的なものと聴覚的なものとの結びつきという点では、たとえば操り芝居と浄瑠璃との結合にも通ずる大テーマともいえるが、比較的近時の事例であるにも拘らず具体的状況を示す資料に乏しく、未開拓の部分が多い分野である。映像の中味と関連づけた音の状況もふくめて今後の解明が待たれる。(塚原康子)

◇研究発表B2(会場506号教室。司会:小日向英俊)

「ブン・ピアット

—カンボジアにおける無形文化遺産としての伝統音楽—
(三枝まり)

三枝まり氏の発表は、1975年以降のカンボジアの文化政策において、ブン・ピアットと呼ばれる合奏形態とそのレパートリーが、これまでいかにその時々の政権の正統性の表明という、政治的な目的のために利用されてきたのかを明らかにしようとするものであった。

氏によれば、ブン・ピアットを含めた今日のいわゆる伝統音楽は19世紀中ごろにタイから取り入れられたもので、さらにそれは当時のフランスの植民地支配を正当化するために意図的に作られたものであったという。しかし現在一般にブン・ピアット—特にその、多くの楽器で構成された華やかで力強い響き—が、アンコール朝時代のクメール民族の繁栄の象徴として当時から続く伝統的な音楽と捉えられているのは、これまで為政者が自らの正統性を示すために、ブン・ピアットをアンコールとの連続性を示すものとして幾度も「再定義」し「復興」を重ねてきたことの結果であるとした。

発表を聞いての感想だが、ブン・ピアットそのものの説明に多くの時間を割きすぎているように思う。また氏が述べた「音楽の政治性」そのものは既に多くの先行研究の蓄積がある。出来ればもう一歩進めて、過去に幾度も為されてきたという「復興」事例ごとの文化政策の特性やそれぞれの差異を丹念に追い、政治性の内実の多様性をも浮き彫りにして欲しかったと思う。そうすれば、ブン・ピアットそのものの説明の中で触れられた楽器編成や舞踊(の場)の変遷の歴史も、

各時代の文化政策との関わりの中でより効果的に述べるものが出来たのではないだろうか。今後の研究の発展を期待したい。(谷 正人)

「一方通行のはしご

—パフォーマンスからみたラウネッダス舞踊の音楽構造—
(金光真理子)

金光真理子氏の発表は、イタリアのサルデーニャ島に伝わる気鳴楽器ラウネッダスのレパートリーの中心を占める、舞踊曲の音楽構造についての新解釈を示すものであった。ラウネッダス舞踊曲には、イスカラと呼ばれる音楽構造(演奏順序の決まった一連の楽節)が存在しており、このイスカラを構成する個々の楽節は、演奏のたびに奏者によって順に即興的に変奏・展開されてゆくものである。そして従来の研究はこうした変奏に、前後するヴァリエーションが少しずつ形を変えながら連なり、一連の楽節を全体として美的に統一することを理想とする「主題連関の原理」を見出していた。

金光氏は、こうした捉えかたは変奏システムを探ることを至上命題とした音楽のみの分析から導き出されるものであって、そこには舞踊を行う側の音楽観が反映されていないと主張する。音楽だけを見るのではなく、踊り手との関係で考えると浮かび上がってくるのは「主題連関の原理」よりもむしろ、ピッキアーダ(一区切りとみなされる拍節の単位)の推移にしたがってステップを替える踊り手にとってステップ予測の根拠となる、「一方通行」という楽節の「演奏順序」であり、これこそがイスカラの本質であると氏は結論付けた。

報告者は、発表者にラウネッダス或いは舞踊の実践経験がどの程度あるのかは知らないが、現地ではラウネッダスと一体のものとしてある舞踊との関係から、長らく前提とされてきた先行研究を乗り越えた点について高く評価したい。今後の課題としては、発表の終盤に多用が目立った「経験的」「慣習的」「正しい」といった言葉の内実を、その認知プロセスをも含めて如何に記述してゆけるかだろう。ますますの研究の発展を期待したい。(谷 正人)

◇研究発表C2(会場507号教室。司会:田井竜一)

「社会変動と祭りの誕生

—埼玉県朝霞市の「よさこい」を中心に—(萩谷彩矢香)

萩谷氏の発表は、埼玉県朝霞市で1994年から始まった「関八州よさこいフェスタ」に関して、朝霞市の発展と変遷に重ね合わせながら、その「祭り」の経緯と意味を探るものであった。東京近郊の住宅として急速に人口が増加して都市化した朝霞市において、「市民まつり」における「よさこい」の導入は、従来型の催しにマンネリ化が生じていた状況を打破するための、行政による提案であり、2003年まで毎年催されている、と報告された。また、こうした「祭り」は都市化で生じた疎外感や「主体性の喪失」からの解決として機能し、「よさこい」は郷土意識や地域文化の再構築、新たなコミュニティの形成や人間ネットワーク創出に貢献する、との意味づけが行なわれた。この発表は午後のラウンドテーブルと内容的に重なり合う点もあり、フロアからは、金城厚氏、梁島章子氏、久万田晋氏、酒井正子氏、岩井浩氏などから活発な質疑が行なわれた。これによって、新しいコミュニティが「よさこい」

のためのクラブ活動や地域活動であること、「よさこい」が年間を通じた活動であること、運営の仕方で高知と異なる点などが明らかになった。ただ、全体を通じて久万田氏が指摘するように「優等生的」であり、いわば行政の用語の上に論が形成されている点に物足りなさを感じた。発表者自身が参加しているのだから、そのフィールドワークに「祭り」の現実を拾い集めて、下からの論が構築されることを期待したい。(永原恵三)

「八丈民謡の最後の伝承者

—奥山熊雄のライフヒストリーと歌—

(Jane Alaszewska)

Alaszewska氏の発表は、1) フィールドワークの対象、2) 伊豆諸島南部・八丈島の概要、3) 奥山熊雄の音楽習得・音楽活動、4) 奥山氏の太鼓演奏の分析と手順が記されていた。まず対象である奥山熊雄(1916-)の簡単な紹介と調査方法が述べられ、地理的環境の概説の後に、奥山氏が子供の頃にどのように太鼓の演奏を習得したか、など太鼓の活動について説明があった。

そして、奥山氏の音楽スタイルと現在の音楽状況を比較するという点で、太鼓の演奏に関する新旧の違いが、叩く姿勢、太鼓の大きさ、曲の構成、叩き手(旧が女性で、新が男性)などの点で述べられた。質疑は酒井正子氏、金城厚氏、梁島章子氏からあり、太鼓を打つときには歌わないが1曲のみ歌うものがあること、熊雄と現在の伝承の仕方は、当時は近所で自然に学んだのに対して現在では毎週の練習会で習得すること、最近の太鼓のリズムが楽譜などで他から学ぶことなどが述べられた。日本語による初めての発表ということであったが、明瞭な日本語を駆使して内容も明快であった。ただ、金城氏が指摘されたように、タイトルと内容が異なること、「最後の」という表現が気になった。また、奥山氏は民謡を歌っておられるようだが、発表では太鼓の説明に終始し歌への言及が少なく、聴く側としてはやはり戸惑いを感じざるを得なかった点が残念である。(永原恵三)

◇ ラウンドテーブル よさこいとエイサー:

「伝統再生」を問う

まず司会の塚田健一氏(アフリカ音楽研究)より、1990年代以降グローバル化の急進展による国民国家の障壁の解体、固有文化間の交流接触の加速、ハイテク技術等が、音楽文化のフュージョン(諸様式の混淆)を促進した。背景には従来自明とされてきたアイデンティティの基盤の流動化とその再構築という状況がある。グローバル化は、文化の同一化よりむしろ多様化、異質化を生みだしており、日本のよさこいとエイサーのここ50年の大変貌も、世界の音楽文化の最先端で起きている地核変動の現れとして捉えうるのでないかとの問題提起がなされた。議論の枠組みとしては1980年代の「創られた伝統」論ではなく、「伝統的」とされながらも現在の脈絡で変えられてゆく局面をみてゆくとの趣旨である。

岩井正浩氏(日本の民俗音楽研究)は高知ネイティブの立場から、1954年開始以来のよさこい祭りの変遷と現状を報告した。当初は商店街振興が目的だったが、地域主導で切磋琢

磨しながら自由で開放的な祭りとして発展。1970年代より洋風化・海外進出、1980年代より正調を自由化し急成長、1990年代は一時落ち込んだが持ち直し、現在は和風回帰でパレードを復活、2000年は県外17を含む33チームが参加、チームも多様化している。1992年札幌に飛び火後全国に広まり、200箇所以上よさこいの名を冠したまつりがある。札幌の宣伝力とイベント性はすごく、一種のブランド現象であり鳴子を使う以外共通性はない。各地の名前・民謡を使うべきで、高知のよさこいを使うのは模倣でありそれ以上の発展性はないとコメントした。

続いて拡張するエイサーについてまず久万田晋氏(沖縄音楽・ポップ研究)が、沖縄内部でエイサーが民俗芸能を基盤に都市の芸能へ進化した過程を報告。本来旧盆に青年会が祖霊供養のため念仏歌などをうたい家まわりや道ジュネー(練り歩き)をした。おそらく衣装はばらばらで、太鼓ではなく扇、ぜい(旗)などを持つ現在の本部町のようなスタイルだったろう。1956~77年のコンクールで、競技場で俯瞰的なまなざしにより鑑賞されるマスケゲーム型芸能に変貌、隊列・音楽・踊り方・衣装・太鼓などが大振り派手になった。1980年代よりクラブチーム型の創作エイサー団体が誕生、共同体を離脱、ジェンダー区分を崩し、生演奏でなく既製のCD音楽を使うなど新しい要素を付加。郷土芸能、創作芸能の中間カテゴリーに位置づけられるのではないかとした。

寺内直子氏(雅楽、沖縄音楽研究)は、【伝統エイサー】から【クラブチーム型創作エイサー】への変化の諸要素を整理、外部への広がりや報告した。脈絡(→非伝統的行事)や担い手(→脱伝統的地域共同体)が変化しても、エイサーと呼ばれるための「伝統のコード」はある。音楽(サンシン、沖縄音階、方言歌詞)、衣装(ウチカケ、頭巾、脚絆、紅型)、踊り(動作パターンとフォーメーション)、太鼓(大太鼓、パーランクー)等である。明るく力強い「沖縄」イメージの表象として、沖縄系住民がいる所を拠点に、日本本土、さらに海外では1960年代にロス、1970年代以降ハワイへ進出。同じくアメリカでブレイクした和太鼓との共通性も指摘した。

城田愛氏(文化人類学、沖縄移民研究)は「エイサーの海外拡散とエスニシティの交錯」として、ハワイの「琉球国祭り太鼓」を中心に報告。「祭り太鼓」は1982年沖縄市で結成、独自のふりつけとスペクタクルな演出で内外に広まり、ハワイ、ロス、南米にも支部がある。1900年の移民開始以来日系社会では沖縄系への差別があったが、戦後生まれの3世は積極的にオキナワンと自称、主体的覚醒、意図的な取捨選択と学習による伝統(ヘリテージ)再生をおこなっている。中でも基地関係者により始められた「祭り太鼓」はエスニックな背景が極めて多元化しており、エスニシティ表現と娯楽の両側面を併せ持つ場として沖縄やロスなどからも踊り手を集め、芸能拡散の新たな中心となりつつある。それはマルチ・エスニックな移民社会ハワイ特有の現象であるとした。

以上よさこいの報告がエイサーに比べ短かったのが惜しまれるが、メンバーシップの公開性とアイデンティティ、オーセンティシティをめぐる葛藤(ムラのエイサーは地域原理に立脚しないクラブチーム型を決して本物のエイサーとは認めないなど)、芸能の飛び火と受容をめぐる解釈(例えば本土側の沖縄エキゾティズムの大衆化など)が議論され、フロアか

らは音楽は誰が提供しどう変化しているのか、よさこいの飛び火は新しいネットワークというよりこれまでの地域社会の追認ではないのか、「祭り太鼓」は振付や音楽が規格化されておりフュージョンは起きていないのではないのか、などの疑問が出された。文化の流用や異種混交が著しいポストモダン状況では、個々人が自らの文化的アイデンティティを選び取り自己成型してゆく(太田好信)といわれる。よさこいとエイサーが拡張性の高い芸能であることはわかるのだが、アイデンティティの再構築の中身と芸能との関係については、さらなる議論の深化を期待したい。非常に大きな問題に目を向けさせる有意義なセッションであった。今後よさこいとエイサーの「究極のフュージョン」はありうるのだろうか、などと考えさせられた。(酒井正子)

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2003年10月25日(土)にエリザベト音楽大学において第68回通常理事会が、翌26日(日)に同大学において第34回通常総会が開催されました。以下に、それらの会議での議決事項のうち特記すべきものをお知らせします。通常総会に関しては、後掲の議事録および添付書類もご参照ください。

- (1) 新入会員の承認 2003年4月理事会以降に仮承認された14名が会員として正式に承認されました(正会員12名、学生会員2名)。
- (2) 会費を長期に滞納している19名に対して、退会したものとみなして処理しました。

会費納入のお願い

昨年10月の第34回総会において、会費請求書が会報と同封されているためにそれと気づかず納入が遅れるケースがあるのではないかと、との御指摘がありました。会費請求書を単独で郵送しないのは経費節減のためですが、とくに近年は同封印刷物がふえて紛れやすく、請求書が届いたことがわかりにくくなっているようです。

そこで、すこしでも目につきやすいよう、試みに請求書の色つきにしてみました。会費未納の方にはピンク色の請求書が同封されていますので、どうぞ請求金額をお確かめのうえ早急に払い込みください。会費未納の場合、その年度の機関誌はお送りできません。なお、本状と行き違いに払い込みがあった場合はどうかご容赦ください。

第21回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第21回田邊尚雄賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集致します。会員各位のご協力をお願い致します。

- (1) 選考委員: 竹内道敬(委員長)、蒲生美津子、草野妙子、谷本一之、樋口昭以上5名
- (2) 対象期間: 2003年1月1日-12月31日

- (3) アンケート締切り: 2004年2月10日必着
- (4) アンケート記入事項: 著者名、著書名、発行年月日、発行所名、なお、論文の場合は以上のほか、掲載紙名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。
- (5) アンケート送り先: 〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号室
(社) 東洋音楽学会 第21回田邊尚雄賞選考委員会

「第5回中日音楽比較研究

国際シンポジウム」報告

12月1日から3日にかけて、中国の上海音楽学院において、中日音楽比較研究国際シンポジウムが行われた。この研究会は、1995年に第1回が福州で開催されてから、天津、ハルビン、沖縄と隔年に行われ、上海で開催される今回で5回を数える。今年は、当初11月末に行われるはずであったが、昨年度のSARS流行により、日程変更を余儀なくされた末の開催となった。参加者は総勢41名(配布された参加者名簿による)、そのうち日本9名(内発表者7名)、中国32名(内発表者22名)である。

1日午前9時から行われた開幕式では、上海音楽学院の楊立青院長、日本大学の蒲生郷昭教授それぞれの挨拶に続いて、過去の日中音楽比較研究の成果を紹介した張前氏の基調講演が行われた。その後、2日間にわたって、上海音楽学院内の楽器博物館2階、工会2階に分かれて、研究発表が行われた。29件もの研究発表について、詳細に言及することはこの紙面では不可能であるが、日中それぞれの音楽に共通する方法論の問題、相互の国の音楽に関する研究、また様々な時代における日中の音楽現象の比較、また相互の影響に関する研究など、時代や内容、視点も多岐にわたったものであった。

これらの研究発表を聞き、報告者はあらためて日中両国の音楽文化の関係の深さを再認識すると共に、このように情報を交換する場が非常に貴重であることを強く感じた。とくに、互いの国の音楽を研究した報告の一部に、明らかに情報の不足が原因と思われる誤解も見出された。このような誤解を解き、互いに生きた情報を交換することが、このような国際的な研究会の最大のメリットであることを報告者は痛感した次第である。

3日目の閉幕式は、上海音楽院内に設置された「中日音楽文化研究センター」の成立式と同時に開催された。このセンターでは、日本音楽のデータベース作成などを行い、日中の音楽文化交流の拠点として活動する予定であるという。なお、このセンターでは、関連書籍の寄贈などを、東洋音楽学会の会員諸氏に広く希望している。(宛先は末尾参照)

さらに、研究発表のほかにも、1日目の夜に江南絲竹の演奏会、2日目の夜の上海中心街観光、そして3日目の水郷地区、西塘散策などが企画されており、それによって上海地域の様々な面を覗くことが出来た。これらは特に報告者をはじめとした、他の地域からの参加者には非常に興味深いものであり、これらを企画した主催者の気配りには感謝したい。

このように、中日音楽比較研究国際シンポジウムは、充実した意義深い会であった。しかし、今回残念であったのは、事前の連絡や情報が、非常に不足していたことである。日本から来た発表者の大部分は、現地について初めて発表の日程を知る事となった。さらに、自身が司会をすることすら、事前に通知されていない司会者も存在した。複数の言語によって行われる学会の場合、情報を統一することが非常に困難であることは想像に難くないが、例えば学会のホームページなどを作り、そこに統一して情報を流すなど、ぜひ今後の課題として検討していただきたい。(熊沢彩子)

中日音楽文化研究センター

住所：200031 中国上海市汾陽路20号

上海音楽学院中日音楽文化研究中心 趙維平(宛)

電話：+86-21-64370137-2175

Eメール：weiping-z@online.sh.cn

会員等異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2003年8月～11月、訂正箇所は下線部)

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です)

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2003年9月-11月、到着順)

『楽道』8, 9, 10, 11月号 正派邦楽会
『浜松市楽器博物館だより』No. 32, 33 浜松市楽器博物館
『アジアセンターニュース』No. 24 国際交流基金アジアセンター
『白い国の詩』9, 10, 11月号 東北電力(株)
『Bulletin of Vietnamese Institute for Musicology』
No. 9 Vietnamese Institute for Musicology
『月刊みんぱく』9, 10, 11月号 国立民族学博物館
『京都アート・エンタテインメント創成研究 News
Letter』No. 2 立命館大学アート・リサーチセンター
『Annotated Bibliography of the Major Publications
of Dr. Kishibe Shigeo - In Celebration of his
Ninetieth Birthday -』 スティーヴン・G・
ネルソン編著 岸辺成雄博士卒寿記念事業委員会
『日本音楽学会会報』第59号
『音楽学』第49巻1号 日本音楽学会
『ぎふ民俗音楽』第59号 岐阜県民俗音楽学会
『猿田彦大神フォーラム年報 あらはれ』第6号
猿田彦大神フォーラム

新刊書籍

- 『アジア映画の大衆的想像力』四方田犬彦著、青土社、¥2,800
 『遊びの歴史民族学』寒川恒夫著、明和出版、¥2,600
 『遊びの中世史』池上俊一著、筑摩書房、¥1,100
 『あなたの日本舞踊 1巻』和角仁責任編集、学研、¥2,400
 『あなたの日本舞踊 2巻』和角仁責任編集、学研、¥2,400
 『あなたの日本舞踊 3巻』和角仁責任編集、学研、¥2,400
 『あなたの日本舞踊 4巻』和角仁責任編集、学研、¥2,400
 『あなたの日本舞踊 5巻』和角仁責任編集、学研、¥2,400
 『あなたの日本舞踊 6巻 論説・資料編』和角仁責任編集、学研、¥1,800
 『奄美まるごと小百科 奄美をもっと楽しむ146項目』蔵満逸司著、南方新社、¥1,800
 『能 梅若六郎』梅若六郎著、平凡社、¥1,900
 『雲南25の少数民族 萩野矢慶記写真集』萩野矢慶記著、里文出版、¥2,800
 『エノケンと〈東京喜劇〉の黄金時代』東京喜劇研究会編、論創社、¥2,500
 『LPレコード再発見 盤に棲む魔物の魅力に迫る』山口克巳著、誠文堂新光社、¥2,200
 『沖縄音楽ディスクガイド』、TOKYO FM出版、¥1,500
 『沖縄チャンプルー文化創造論』比嘉佑典著、ゆい出版、¥2,800
 『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』大城学著、砂子屋書房、¥15,000
 『音と文明 音の環境学ことはじめ』大橋力著、岩波書店、¥4,400
 『音の世界の心理学』重野純著、ナカニシヤ出版、¥2,600
 『楽譜の数学』大塚正元著、早稲田出版、¥2,500
 『仮名手本忠臣蔵』竹田出雲原作、ポプラ社、¥1,600(児童よみもの)
 『歌舞伎十八番』戸板康二著、隅田川文庫/星雲社、¥1,400
 『神と鬼の系譜』上里真奈美著、彩図社、¥1,300
 『韓国歌の旅』安準模著、白帝社、¥2,000
 『北上川神楽囃子』三好京三著、チクマ秀版社、¥1,524
 『九州の民俗仮面』高見乾司文、鉦脈社、¥2,800
 『狂言三人三様 茂山千作の巻』野村萬斎・土屋恵一郎編、岩波書店刊、¥3,150
 『狂言三人三様 野村萬斎の巻』野村萬斎・土屋恵一郎編、岩波書店刊、¥3,150
 『京都美術館・博物館ベストガイド』アミューズ著、メイツ出版、¥1,500
 『金砂大祭礼の民俗誌』榎本実共著、那珂書房、¥1,600
 『近世歌舞伎舞踊作品 恋多き娘たち』目代清著、邦楽と舞踊出版社、¥6,000
 『クマ祭りの起源』天野哲也著、雄山閣、¥2800
 『黒川能と興行』桜井昭男著、同成社、¥2600
 『劇場に行こう 歌舞伎にアクセス』伊達なつめ著、淡交社、¥1600
 『劇場に行こう 能にアクセス』井上由理子著、淡交社、¥1600
 『劇場に行こう 文楽にアクセス』松平盟子著、淡交社、¥1600
 『小泉文夫著作選集 5 音のなかの文化』小泉文夫著、学研、¥1800
 『小泉文夫著作選集 4 空想音楽大学』小泉文夫著、学研、¥1,800
 『声の神話 奄美・沖縄の島じまから』真下厚著、瑞木書房/慶友社、¥3,900
 『瞽女さん 高田瞽女の心を求めて』杉山幸子著、川辺書林、¥2,300
 『鼓動 いのちのビートを響かせて』大倉正之助著、致知出版社、¥1,905
 『祭礼と芸能の文化史』菌田稔編、思文閣出版、¥6,500
 『薩摩と琉球』横山健堂編著、榕樹書林、¥15,000
 『実践・発達障害児のための音楽療法』E. H. ボクシル著、人間と歴史社、¥3,800
 『室内音響学 建築の響きとその理論』ハインリッヒ・クットルフ著、市ヶ谷出版社、¥7,000
 『しの笛を吹こう 楽しく、ゆったり、初めから…やさしい篠笛教本』末永克行編著、太鼓と芝居のたまっ子座出版、竜吟社発売元、¥1,700
 『声明は音楽のふるさと』岩田宗一著、法蔵館、¥1,600
 『志ん朝の落語 1 男と女』古今亭志ん朝著、筑摩書房、¥950
 『志ん朝の落語 2 情はひとの…』古今亭志ん朝著、筑摩書房、¥950
 『志ん朝の落語 3 遊び色々』古今亭志ん朝著、筑摩書房、¥950
 『神道の祭り』神道国際学会編、神道国際学会/たちばな出版、¥1,600
 『新吉原画報・劇場図会』槌田満文監修・編集、ゆまに書房、¥20,000
 『スウェーデンの社会福祉と音楽療法 音楽療法士・福祉職としての体験から』大滝昌之著、音楽之友社、¥2,000
 『図説・中国文化百華 006 神と人との交響楽』稲畑耕一郎著、農山漁村文化協会、¥3,048
 『世阿弥 人と文学』石黒吉次郎著、勉誠出版、¥1,800
 『世阿弥の墓』水原紫苑著、河出書房新社刊、¥1,575
 『千作狂言 写真集』ヒロセマリコ写真、アートダイジェスト、¥3,619
 『チベット文化史』D. スネルグローヴ著、春秋社、¥5,800
 『中世の国家儀式「建武年中行事」の世界』佐藤厚子著、岩田書院、¥5,900
 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第2巻』東京芸術大学百年史編集委員会編集、音楽之友社、¥36,000
 『東西落語がたり 柳家花緑思いつき対談』柳家花緑著、旬報社、¥1,400
 『時代(とき)のなかの歌舞伎 近代歌舞伎批評家論』上村以和於著、慶応義塾大学出版会、¥3,000
 『日本の漁村・漁撈習俗調査報告書集成 5 中部地方の漁村・漁撈習俗』大島暁雄監修、東洋書林、¥28,000

- 『日本の漁村・漁撈習俗調査報告書集成 6 中部地方の漁村・漁撈習俗』大島曉雄監修、東洋書林、¥30,000
- 『日本の時代史 15 元禄の社会と文化』石上英一ほか企画編集委員、吉川弘文館、¥3,200
- 『能・狂言なんでも質問箱』山崎有一郎・葛西聖司著、繪書店刊、¥1,890
- 『橋がかり』高橋康也著、岩波書店刊、¥3,780
- 『八代目橋家円蔵の泣き笑い人情噺』小久保晴行著、イースト・プレス、¥1,400
- 『憑霊の民俗』川島秀一著、三弥井書店、¥2,800
- 『分析的音楽療法とは何か』M. プリーストリー著、若尾裕・多治見陽子・古平孝子・沼田里衣訳、音楽之友社、¥3,400
- 『平安時代儀式年中行事事典』阿部猛編、東京堂出版、¥6,500
- 『邦楽ってどんなもの』星野栄志著、演劇出版社出版事業部、¥3,333
- 『放課後の音楽レッスン』大橋悦子著、晶文社、¥1,500
- 『まことの花』梅若六郎著、世界文化社刊、¥2,100(税込)
- 『八重山研究の歴史』三木健著、南山舎、¥1,880
- 『山形「民俗」探訪』武田正著、東北出版企画、¥2,500
- 『寄席楽屋事典』花月亭九里丸編、東方出版、¥1,500
- 『落語長屋の商売往来』矢野誠一著、文芸春秋、¥552
- 『落語の空間』延広真治編集、岩波書店、¥3,000
- 『琉球・沖縄史の世界 日本の時代史18』豊見山和行編、吉川弘文館、¥3,200
- 『琉球の伝承文化を歩く 2 西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』狩俣恵一編、三弥井書店、¥1,800
- 『琉球民俗の底流 古歌謡は何を語るか』吉成直樹著、古今書院、¥2,800
- 『琉球を守護する神』原田禹雄著、榕樹書林、¥4,800
- 『笑いの世界』対談桂米朝著、朝日新聞社、¥1,200

新発売視聴覚資料

●CD

- 『コロムビア邦楽名曲セレクション20』シリーズ、各¥2,300、COCJ-32441~60
1. 雅楽 COCJ-32441
 2. 謡曲 COCJ-32442
 3. 義太夫 COCJ-32443
 4. 長唄 COCJ-32444
 5. 清元 COCJ-32445
 6. 常磐津 COCJ-32446
 7. 新内 COCJ-32447
 8. 歌舞伎 COCJ-32448
 9. 端唄 COCJ-32449
 10. 小唄 COCJ-32450
 11. 地歌箏曲(生田流)COCJ-32451
 12. 箏曲(山田流)COCJ-32452
 13. 尺八 COCJ-32453
 14. 琵琶 COCJ-32454
 15. 吟詠 COCJ-32455
 16. 小鼓 COCJ-32456
 17. 大和楽 COCJ-32457
 18. 声明 COCJ-32458
 19. 古曲 COCJ-32459
 20. 沖縄 COCJ-32460
- 『落語笑事典1~15』柳家小三治、古今亭志ん生、柳家小さん他、各¥2,000 KICH-3231~3245

編集後記

今回の会報は、今秋広島で開催された第54回大会の記録である。実演つき公開講演会は、広島、という地域性を生かした興味深い企画であった。出席者数が少ないのが地方大会の

常となってしまったかのように残念だったが、大会参加費の見直し等を含めて考えていかなければならない課題であろう。短い期日の間にレポートをまとめてくださった報告者各位には感謝申し上げたい。

第34回通常総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時：平成15年10月26日(日)12:30~14:00
2. 場所：エリザベト音楽大学506号教室
3. 出席者：243名(委任状出席197名を含む)
〔備考〕正会員数673名、定足数225名
4. 議事事項と審議の経過および結果
定款第25条により谷本一之会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。ついで定款施行細則第17条により副議長選出を要請し、清水淑子、蒲生美津子両氏が選出された後、以下の議事を審議した。

第1号議案 平成14年度(2002年度)事業報告の件
植村幸生理事(総務担当)が「平成14年度(2002年度)事業報告」(【添付書類1】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。

第2号議案 平成14年度(2002年度)収支決算の件
塚原康子理事(経理担当)が「平成14年度(2002年度)収支決算書」および「第53回大会特別会計収支計算書」(【添付書類2】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。

第3号議案 平成15年(2003年)8月31日現在貸借対照表・財産目録の件
塚原康子理事が「平成15年(2003年)8月31日現在貸借対照表」、「財産目録」および「正味財産増減計算書」(【添付書類3】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。

第4号議案 平成15年(2003年)8月31日現在会員異動状況の件
植村幸生理事が「平成15年(2003年)8月31日現在会員異動状況」(【添付書類4】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。また、竹内道敬・徳丸吉彦監事による「監査報告」(【添付書類7】)を清水淑子副議長が代読し、議長が説明した。

第5号議案 平成15年度(2003年度)事業計画の件
植村幸生理事が「平成15年度(2003年度)事業計画」(【添付書類5】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。

第6号議案 平成15年度(2003年度)収支予算の件
塚原康子理事が「平成15年度(2003年度)収支予算」(【添付書類6】)について説明をおこなった。議長がこの承認を議場に諮ったところ満場一致で可決承認された。

第7号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案はとくに出されなかった。

(以下、添付書類)

【添付書類1】

平成14年度(2002年度)事業報告

(自平成14年9月1日 至平成15年8月31日)

1. 事業の状況

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2002年10月12日
- ・会場 東京藝術大学
- ・課題 「近代日本における音楽・美術の生成」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2002年10月13日
- ・会場 東京藝術大学
- ・発表件数 10件、パネルディスカッション 1件

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2003年10月
- ・会場 エリザベト音楽大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 7回(第1回～第7回、12・2・3・4・5・6・7月)
- ・会場 成城大学、上野学園日本音楽資料室、東京藝術大学音楽学部、お茶の水女子大学、上越教育大学
- ・内容 シンポジウム、研究発表、卒業論文・修士論文発表
- ・備考 12月・5月の定例研究会は、日本音楽学会関東支部と合同。7月の定例研究会は、日本音響学会音楽音響研究会と合同

○西日本支部

- ・回数 5回(第210回～第214回、9・11・2・4・6月)
- ・会場 大阪音楽大学、大阪大学、国立民族学博物館
- ・内容 卒業論文・修士論文発表、パネル、シンポジウム、講演
- ・備考 9月、11月の定例研究会は、日本音楽学会関西支部と合同。2月の定例研究会は、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」+大阪芸術大学芸術研究所+「ベトナム少数民族無形文化遺産調査・映像記録化および人材養成プロジェクト(RVMV)」日本委員会との共催

○沖縄支部

- ・回数 2回(第35回～第36回、2・5月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 研究発表、講座

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第68号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、通信、書評・視聴覚資料評、大会・研究会記録、田邊尚雄賞記録

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第56号(2002年9月10日)、第57号(2003年1月20日)、第58号(2003年5月10日)

・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、定例研究会報告(56号のみ)、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第1号(2002年11月30日)、第2号(2003年5月10日)
 ・内容 東日本支部発足について、東日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会の報告

○『西日本支部だより』(『支部だより』)

・第45号(2003年1月20日)、第46号(2003年4月7日)、第47号(2003年8月22日)

・内容 西日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、支部会員への諸通知、その他

○『沖縄支部通信』

・第29号(2003年5月5日)
 ・内容 定例研究会記録

〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7)日本学術会議への協力

○会員山口修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣

(8)ユネスコ国際音楽評議会(IMC)日本国内委員会への参加

○会員柘植元一氏を理事として派遣

(9)音楽文献目録委員会への参加

○会員奥山けい子、田中多佳子、蒲生郷昭の3氏を委員として派遣(2002年4月1日より)

(10)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11)「田邊尚雄賞」

○第19回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2002年10月12日
- ・受賞者および授賞対象 青柳隆志『日本朗詠史 年表篇』(笠間書院 2001年2月発行)
- ・賞金 100,000円

○第20回田邊尚雄賞の選考と発表

- ・受賞者および授賞対象 根岸正海『宮古路節の研究』(南窓社 2002年2月発行) 福岡まどか『ジャワの仮面舞踊』(勁草書房 2002年2月発行)

〔5〕研究および調査(定款第5条5)

(12)国内または国外における学術調査および研究
 とくになし

〔6〕その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(「2. 処務の概要」以下は省略)

【添付書類5】

平成15年度(2003年度)事業計画

(自平成15年9月1日 至平成16年8月31日)

1. 事業の状況

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施 (定款施行細則第3条1)

- ・日時 2003年10月25日
- ・会場 エリザベト音楽大学
- ・課題 「中国地方の民俗芸能」

(2) 研究発表大会の実施 (定款施行細則第3条2)

- ・日時 2003年10月26日
- ・会場 エリザベト音楽大学
- ・発表件数 12件、ラウンドテーブル 1件

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2004年10月(予定)
- ・会場 未定

(4) 定例研究会 (定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 8回(10・12・2・3・4・5・6・7月)
- ・会場 成城大学、上野学園日本音楽資料室、東京藝術大学音楽学部、お茶の水女子大学、ほか
- ・内容 シンポジウム、研究発表、卒業論文・修士論文発表
- ・備考 定例研究会のうち1回以上は日本音楽学会関東支部と合同

○西日本支部

- ・回数 5回(9・11・2・4・6月)
- ・会場 大阪音楽大学、大阪大学、国立民族学博物館、ほか
- ・内容 卒業論文・修士論文発表、パネル、シンポジウム、講演
- ・備考 9月の定例研究会は日本音楽学会関西支部と合同

○沖縄支部

- ・回数 2回(2・5月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 卒業論文・修士論文発表、研究発表、講座
- 〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第69号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、通信、書評・視聴覚資料評、大会・研究会記録、田邊尚雄賞記録

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第59号(2003年9月10日)、第60号(2004年1月)、第61号(2004年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第3号(2003年9月10日)、第4号(2004年2月)、第5号(2004年5月)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会の報告、その他

○『西日本支部だより』

- ・年3回(第48号～第50号)
- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、支部会員への諸通知、その他

○『沖縄支部通信』

- ・年3回(第30号～第32回)
- ・内容 定例研究会案内、定例研究会要旨と質疑応答記録、その他

〔3〕 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

- (7) 日本学術会議への協力
- 会員一名を芸術学研究連絡委員会委員として派遣
- (8) ユネスコ国際音楽評議会(IMC)日本国内委員会への参加
- 会員一名を理事として派遣
- (9) 音楽文献目録委員会への参加
- 会員三名を委員として派遣(2004年4月1日に新委員に交代予定)
- (10) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
- 日本国内委員会として加盟

〔4〕 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」

○第20回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2003年10月25日
- ・授賞者および授賞対象 根岸正海『宮古路節の研究』(南窓社 2002年2月発行) 福岡まどか『ジャワの仮面舞踊』(勁草書房 2002年2月発行)
- ・賞金 各50,000円

○第21回田邊尚雄賞の選考と発表

(2004年4月予定)

〔5〕 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究とくになし

〔6〕 その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

- (13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
- (14) 事務所移転に関する調査・検討

【添付書類7】

社団法人東洋音楽学会会長 谷本一之殿

監査報告書

社団法人東洋音楽学会の平成14年度財産の状況ならびに、業務執行の状況を監査しましたが、健全に運営されていることを認めます。

平成15年9月29日

監事 竹内道敬

監事 徳丸吉彦